
夢の続き

yolu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の続き

【Nコード】

N2487Z

【作者名】

youu

【あらすじ】

夢を見ていたら、さらに夢を見た。

雨は不規則にだらだらと落ち続けている。
まるで自分の自堕落な生活を現すかのようだ。
自分もこのまま雨のように沈んで消えてはくれまいか。
願うものの、呼吸の音は静かな部屋でこだまして、鼓動の音まで
鼓膜に響く。

「なぜ、死なないのだろう」

口の中で呟いてみる。

果たしてそれが本来の自分の声だったか、誰かの音を真似て聞いているのかわからない。

久しく人と話してないからだ。

「あなた生きてる」

言葉が返ってきた。

思わずまぶたを開くが、天井のほかには何も見当たらない。

夢の続きでも聞いたのだろうか。

幻聴まで聞こえるのに、生きているのがさらに不思議になる。

「だってあなたは生きてるから」

また聞こえた。

寝床の奥から、くまなく視界を回すが、人などいない。

そう、この部屋には自分以外はいないのだ。

ここは隔離されていて、いや、家族から隔離された、ただの空間だ。

あつてないような空間。

餌が運ばれてくるだけの空間。

家族の声も顔も、もう記憶の塵に埋まってしまった。

いやな幻聴だ。目を閉じる。

いつもと同じ真つ暗な空間。のはずが、女が立ってる。

見たことのない女だ。

白い女。服がというより、存在が白い。

夢の続きか……？

「夢の続きでいい。

でもあんたは生きてる。

でも、死んでる。

生きてるのに、死んでるなんて、

馬鹿みたい」

ムツとした。

言葉がついて出る。

「馬鹿だとは何だ！

俺だって好きでこんなになってるわけじゃないっ

お前に何がわかる！

あんなことさえなければ、俺だってこんなことしてねーよ！」

「あーうるさいうるさい。

あんなことも、こんなことも、なんもわかんないよ。知りたくもない。

だって、私は死んだから」

「……は？」

意味がわからない。

「うつせーな！
死んでるとかいうなら、俺に口出しすんじゃないよ。
関係ねーだろ」

白い女の顔は見えないが、呆れている空気は感じられた。
「そんなの知らないよ。」

気づいたらここにいて、話しかけたら、あんたに聞こえただけ。
つか、ほんとに、馬鹿つて死ぬまでなおんないんだねー
あんた死んでも馬鹿なんじゃない？」

景色がはじけた。

彼女が白い光に包まれたかと思ったら、一面が一気に色づき始める。

春の日差しに包まれるような、そんな景色だ。

カナコ、遅刻するわよ」

母親らしい声でした。

「時間やばい！ なんでもう少し早く起こしてくれなかったの？」

「あんたが起きないのが悪いんじゃない。ほら、いつてらっしゃい」

「いつてきますす！」

そう叫んだ声はカナコという女子高生だった。

白い女だ。なぜかそう思った。

『そう、私。』

ずっと前の私。

見えて』

カナコは短いスカートをなびかせながら、赤い自転車にまたがり、漕ぎ出した。

軽やかに進む自転車はどんどんスピードが上がっていく。

交差点に差し掛かった。

信号は赤だ。

だが彼女の自転車のスピードは落ちない。

『おい、』焦る自分をよそに、白い女は黙っている。

すっと指をさしたとき、自分の視界は自転車の上だった。

『やばい、ブレーキかない、やばい

なんで、なんで、やばい、なんで』カナコの心の声が聞こえる。

視線は信号。赤信号。どンドン迫る。

空気の流れる感触。

彼女のハンドルを握る手の強さ。

背中に流れる汗の冷たさ。

全部感じられる。

いやだ。逃げたい。気持ちが悪い。

胃が痛い。逃げたい。

吐きそうだ。いやだ。逃げたい。胃が痛い。

気持ちが悪い。

緊張というレベルじゃない。

緊張というレベルじゃない。

逃げたい。

逃がして。

見たくない。

近づく車。

消えたい。

狭まる視界。

いやに遅い。

走馬灯。彼女の走馬灯。

遅い。動きが遅い。

逃げたい。

鼓動が破裂する

右側に衝撃がきた。

右を向こうにも視界が空を向いて、すべての感覚が千切れていく。

あ、終わった

カナコの声がいやに冷静で脳裏に焼きつく。

寒気がした。

緊張よりも、恐怖よりも、虚無感が全身にまとわりつく。

終わった

たった一つの言葉なのに、冷たく、重い。

軽く飛んでいきそうな言葉だったのに、重みだけが残っている。

青白い虚無感が足首を掴んで離さない。

カナコの視界が途切れたとき、空から眺めるように自分はいた。

訳がわからぬまま目を凝らすと、跳ね上げられた彼女の体が、灰色の地面に落ちていた。

身体は崩れた人形のように歪んでいる。

ひしゃげた車と潰れた自転車。

赤黒い色が一面に散らばる。

ザク口を割ったような彼女の頭がわかった。

目が合った。

思わず目を閉じた。
ギョツと閉じた。

恐る恐る視界を外しながら開いていくと、また暗い空間に、女が浮いている。

「どう？ 死ぬ体験。

死ぬのは人生で一回しかできないから、疑似体験できたあんたは
幸せ者だね」

女は笑った。

カラカラと笑う。

嘲笑したような、そんな笑いだ。

胃が握りつぶされ、心臓が破裂するかと思ったのに、それを笑っている。

まだカラカラと笑っている。

あまりの体験に返す言葉も見つからなくて、何を考えればいいの
かもわからなくて、気持ちのやり場がわからないまま、勢いで女を
睨んだ。

「で？ って感じだよね」

女は、自分に笑った。

何をいいだすんだ。

驚く自分をよそに、苦く顔を歪めながら、鼻で笑う。

呆れてしまった。

我に返ったのか、あっという間に怒りがこみ上げてきた。

「今までのことはなんだったんだ。

ただの肝試しか？

ふざけるな！

遊びなら、別のところでしろー！」

女は聞こえているのか聞こえてないのか、罵声になにも反応をせず、ただ俯きながら、ぼつりとこぼした。

「別に、それぞれじゃんね。

私は運悪く死んで、あんたは運悪く生きてる。

それが今の自分らの状態だからね」

「したらなんであんな体験させたんだよ！

一生トラウマじゃねーか」

「それぐらいがちょうどいいよ

死ぬのが怖いと思わなきゃ」

直球だった。

あまりのストレートに、自分の勢いが消えてしまった。

確かに。

いつ死んでもいいと思ってた。

なんで死ねないんだろうとか、だれか殺してくれないかとか、でも痛いのは嫌だとか、都合のいいことばかり考えてた。

でも死ぬ勇気もなく、ただダラダラと呼吸をして、どうしていいかわからず毎日を食いつぶす。

害虫のほかなくて、この家にはいられないと思いつつながら、居続けているのが現実で

「私のかわりに生きてなんて言わない。
けどさ、死んだやつは存在はない。
けど、生きてるやつは存在してる。
その意味わかる？」

首を横に振った。

「変わるってことなんだよ」

さらに呆れた。

そんなのできているなら、部屋にこもったままでいい。
仕事にもついているだろうし、彼女もできてるかもしれない。
友達だっているだろうし、こんなくだらない生き方なんかして
ない。

女は笑った。

ただ、笑った。

「生きたまま死んでるより、
ちよっとだけ生きてみたっていいじゃない」

今は死んでる？

腐ってるよな。

死んでると同じか。

確かに、言い訳なんだ。

変わればこんなことになってない。

変わるうとしていないから、変わらない。

そんなことぐらい知ってる。

変わってるヤツだっている。

だけど変われない多数に囲まれて、変な安心をつかんだ気になつて。

回りもそうだから、大丈夫なんて思つて。

その回りだつて、ネットの中の住人で、どこまでがリアルに同じかなんてわからない。

ただそう思つていただけだ。

自分を肯定するために一生懸命、無意味な砦を作つていただけ。

わかつてる。

わかつてる。

わかつてる。

「わかつてるよ！」

でも、できねーんだよ！！

わかんねーだろ、こんな気持ち！！」

「わかんない。

でも、

とりあえず、空気の入れ替えしたら？」

暗くなった。

肩をたたかれた気がして、飛び起きてみる。

薄暗い部屋で、やっぱり誰もいない。

手を見た。

やたらと力強く握っていたのか、爪が手のひらに食い込んだ痕がある。

変な夢を見た気がする。

自転車には乗りたくない気分だ。
意味がわからないけど。

何かはよく覚えていない。
だけど、

カーテン、開けてみようかな。

なんか、そう思う。

おもむろに窓に手を伸ばした。

雨の今日だったはずなのに、いつのまにか晴れていて、日差しが
痛い。

日差して痛いものだったんだ。

生きてる感じがした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2487z/>

夢の続き

2011年12月9日01時08分発行